

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2016.10)平成27年度:52.

ハザードマップを使用した転倒予防教育の効果

岡安 恵理, 大橋 友美, 鉄川 洋平, 蛭子井 愛

ハザードマップを使用した転倒予防教育の効果

キーワード：転倒予防、患者教育、ハザードマップ、医療安全、患者参画型

○岡安 恵理・大橋 友美・鉄川 洋平・蛭子井 愛

旭川医科大学病院

I. 目的

院内の危険箇所を表示したハザードマップが患者にどのような効果があったかを明らかにし、退院後も継続できる効果的な転倒予防教育を検討する。

II. 用語の定義

ハザードマップ：A病院A病棟で作成した院内の転倒しやすい危険箇所（曲がり角、浴室、段差、スロープ、絨毯等のある場所）の写真と絵を載せた図とする。

III. 研究方法

1. 対象者：

A病棟に入院し頸椎・腰椎・股関節・膝・足関節・足趾の手術を受け、ハザードマップを用いた転倒予防教育を受け歩行に補助具を必要としている者

2. 研究期間：2015年3月18日～6月15日

3. データ収集方法：自記式アンケート調査

IV. 倫理的配慮

研究の参加・不参加によって受ける医療に差がないこと、回答したくない内容は無回答で良いこと、アンケートの回収にて参加の同意とすることを書面と口頭で説明し同意を得た。研究者の所属する施設の倫理委員会にて承認を得た。

V. 結果

調査用紙は39名に配布し回収率は100%で回答に欠損のない37名分を分析対象とした。使用している補助具は歩行器が22名、杖が9名、松葉杖6名、手術部位は、腰椎2名、股関節17名、膝16名、足関節2名だった。「入院前に『転ぶこと』が自分に起こると思ったことはあるか」では、「とても思う・少し思う」が21名(57%)、「どちらでもない」が3名(8%)、「あまり思わない・全く思わない」が13名(35%)だった。

「ハザードマップは安全に行動する上で参考になったか」では、「非常に参考になった・少し参考になった」が34名(92%)、「どちらでもない」が3名(8%)だった。

「ハザードマップを見て転倒予防に興味を持ったか」では「とても興味を持てた・少し興味を持てた」が31名(83%)、「どちらでもない」が6名(16%)だった。「ハザードマップは退院後の転ばない生活をする上で参考になったか」では、「非常に参考になった・少し参考になった」が33名(89%)、「どちらでもない」が4名(11%)だった。「自宅に帰ってから、転倒に気をつけた行動をしようと思うか」では、「とても思う・少し思う」が36名(97%)、「どちらでもない」が1名(3%)だった。

「自宅に帰ってからどのようなことに気をつけようと思うか」では、「階段や段差」「浴室のタイル」という具体的な回答が20件あった。「入院前に『転ぶこと』が自分に起こるものと思ったことはあるか」で「どち

らでもない・あまり思わない・全く思わない」と答えた16名で、そのうち「ハザードマップを見て転倒予防に興味を持ったか」で「とても興味をもてた・少し興味を持てた」のいずれかを回答した者は12名(75%)だった。「ハザードマップ以外で転倒予防の参考になったものはあるか」(複数回答、総回答件数75件)では、「自分が転びそうになった経験」が3件(8%)、「見守り時の看護師の言葉」が29件(76%)、「理学療法士の言葉」が20件(53%)、「医師の言葉」が15件(39%)、「その他」が8件(21%)だった。

VI. 考察

先行研究では患者に視覚的刺激を与えることで転倒・転落に対する危険因子に気付くことができると述べられている¹⁾。自分に転倒は起こらないと感じていた者のうち、ハザードマップの説明後に転倒予防に興味を持てたと回答した者が75%であることから、術後を転倒予防行動への動機づけの機会と捉え、ハザードマップの視覚的效果によって介入することは有効と考える。自宅へ帰っても転倒に気を付けるために具体的に記載した回答がハザードマップの説明内容と類似したことからハザードマップは、院内の危険だけでなく、退院後の生活の中での危険を認識する効果があった。

「ハザードマップ以外で転倒予防の参考になったものはあるか」では、看護師・理学療法士・医師の言葉のいずれかを答えた者は92%で、見守り時の看護師の言葉と答えている者が一番多い。先行研究では患者の意識変化となる関わりを持つことができれば更に転倒・転落予防に繋がると述べられている²⁾。このことからハザードマップだけではなく医療者が患者の行動中に助言することも患者の転倒予防に対する関心を高めたと考える。ハザードマップに関しては「1度では覚えられない」「設置場所を増やして欲しい」という意見があり、これらを反映させ病院内の安全だけではなく退院後の生活の安全を考えられるように教育していくことが重要と考える。

VII. 結論

ハザードマップを使用することで、患者に視覚的に働き転倒予防に興味・関心をもつきっかけとなった。ハザードマップを用いた転倒予防教育によって患者は退院後の生活上の危険を具体的にイメージ化できた。

VIII. 引用, 参考文献

- 1) 長尾麻未,他：患者参加型の転倒・転落予防,第41回日本看護学会論文集(成人看護Ⅱ),P101-104,2010
- 2) 石井敦子,他：転倒・転落アセスメントシートの段階的評価,第33回日本看護学会論文集(看護管理),P48-50,2003